

献杯

1970年代の後半の話です。中学の同級生が教室に教育上よろしくない雑誌を持ち込み、社会科の若い教師に没収されました。先生は「アリス」のファンでした。悪友は「谷村新司もこの本の収集家だそうです。」などと釈明した。先生はニヤリと笑い返してくれた。チンペイさんが音楽のヒーローから私達の「神」になった瞬間です。

東京、神田神保町「芳賀書店」という素晴らしい品揃えも本屋さんがある。ポリエチレン製の袋に梱包されて立ち読みは出来ないけれど。そう教えてくれたのも、彼の深夜番組だったような気がする。親しみやすい兄貴のような存在でした。

谷村さんの訃報に接し帰らざる日々がよみがえる。アリスの曲で初めてギターの弾き語りを覚えた。そんな方もいるのではないですか。「冬の稲妻」は3つのコードでなんとか演奏できる。出来の悪いモノマネ芸人だったけれど。でもコピーしたくなる何かがあった。人の痛みに共鳴する温もりのようなものだろうか。

団塊の世代だ。が、楽曲に社会的なメッセージを託すことは好まなかった。「それよりあのコから電話がかかってこない。どうして?という歌のほうが自然」と語った。美しい旋律と歌詞は、中国の人々も魅了しました。「野辺に咲きたる一輪の花に似て、儚きは人の命」とは「群青」の一節です。名曲を胸に献杯したい。

鎌野



吉田神社祭典

10月17日に地元、吉田神社祭典がありました。この祭りの本日（ほんび）は10月17日と決まっています。このお祭、通称吉田さんは文化3年(1806年)に悪疫が流行したので、富士岡地区の8カ郷（沼田、中清水、二子、竈、大坂、萩蕪、中山、駒門）が京都の吉田神社を勧請した事が始まりとなっています。現在では塚原区も加わり9つの区が交代で御輿を奉遷します。笛・鼓・大小太鼓の打ち囃子をしながら御輿の送り迎えをします。

今年は中山区から駒門区へ御輿が受け渡されました。次に、私の住む中山が祭りの迎え当番となるのは8年後で、送りを9年後に担当することとなります。毎年ではなく8年おきというのが、この祭りが200年以上続いている秘訣かも知れませんね。

祭りや様々な会にしろ、何時かは終わりが来ます。何十年後か何百年後か、何千年後かかもしれませんが、何時は必ず終わりが来ます。でも、終わらせるのは、始めるより大変です。お祭りも様々な会も、始めるときはやめる時を決めて欲しいと、僕は常々思うのです。そうしないと、何千年後かには毎日が何かの祭り、何かの会で一杯になってしまうことでしょう。AIが人間に代わって仕事をしてくれて、人間が働かなくてもよくなれば、それでもいいかも知れませんがね。そうなるとおそらく、祭りも会もAIがやるようになるでしょうね。どうなる！未来！

苦樹



配り

第
293
便

勝亦製材駿河鉄骨株

住まい塾御殿場教室
TEL (0550) 87-0048
FAX (0550) 87-1237
〒412-0035 静岡県市中山518番地

宵闇に背を丸めてみやる空光に戸惑う濃藍の雲有り
ねがみともみ



鎌首をもたげる様に林立し
「トヨタウーブン・シティ」に働くクレーン
勝亦りつ子



好みはどれだ？

きよみ、はるみ、せとか、由良、こん太、寿太郎、不知火。他にもたくさん有るようですが、静岡で生産されている柑橘類の一部です。

夏の梨、冬の蜜柑、果物の二大巨頭と私が勝手に呼んでいますが、そろそろみかんの美味しい季節がやってきます。炬燵に入ってボケーッとテレビを覗つつみかんを頬張る。無心で皮を剥く。それを一房、また一房と口の中へと。気づくと籠の中のみかんは消えている。なんてことが幸せだったりします。

最近初めて食べた「由良」は10月上旬に熟す極早生種の一種だそうで、極早生の中でも強い甘みとコクを保有し、極早生の爽やかな酸味と合わさって人気の高糖度温州みかんの品種の一つなんだそうです。採れる期間が10月～11月上旬と非常に短いので見つけたら必ず買ってしまいます。

蜜柑といえば甘酸っぱいものですが、最近のみかんは本当に甘いですね。もちろん甘いだけでは美味しくないので酸味とのバランスが大切なのですが、この由良はまさにワタクシの求めていた蜜柑だといっても過言ではありませんね。唯一の弱点は皮が薄すぎて綺麗に剥けないところと少々小ぶりなところでしょうか。温州みかんの品種の一つである由良や寿太郎の他にも温州みかん和其他の柑橘を掛け合わせて作られたきよみ、はるみもなかなか重厚な甘さで柑橘好きの心を揺さぶってきます。しかしなんで柑橘の品種名って女性っぽい名前が多いのでしょうか？

好きな柑橘の話をしていると何やら誤解されそうなので蜜柑の話は小声ですることとします。

柳田 敏和



文字



部屋の隅に表書きのない茶封筒があったので、なんだっけ？と思い開けてみた。それは新緑が眩しい頃、旧岸邸で開催した“写経”だった。筆の書を見て、ほくそ笑む。普段なら書いた写経は昇天（燃やす）させるのだが、忘れていたその写経の文字は、後半何行かの文字に動揺が見て取れる。なんだこの集中が途切れて回復するのに時間を要したような文字は・・・と、「ぎゃ～！」と思ったその時を思い出した。旧岸邸で写経のイベントはコロナ前は畳の部屋と椅子が使える部屋とで2-30人が参加していた。旧岸邸の2階の部屋で窓から新緑が見え、窓も開けると爽やかな風が入る。制限時間は2時間で終わった人は部屋から退出する。という流れになっている。参加者は初心者であれ手慣れた人であれ全員写経をする目的なので静かに筆をはしらせる。今回はコロナも5類になったとはいえ、人数を減らして12人位で行った。畳の部屋は正座で3人位座れる長い机に二人座った。前にも書いたが、書き始めると雑念が押し寄せる。集中して調子がでてきて隣の方の筆運びも気にならなくなってきた後半、終わった隣の方が退出しようと席を離れる時に机を引っ掛けた、「ぎゃ～」。である。まあそういうときは往々にしてあるのだが、集中が途切れてしまったので立て直すまでの時間の文字に動揺がでた。その文字を時間が経過して見てみると、笑える・・・あの出来事で文字が動揺するなんて、私の集中もまだまだだと思った次第です。じゃあ一人で行える所に行けばいいじゃないか！と思うかもしれないが、他の色々な人が居て、色々な出来事があってはじめて自分と向き合えて集中できる。と思っている。そのイベントに来た人達の雰囲気も毎回違うし、友達を連れて行ったときの雰囲気も違う。それもまた面白い。考えてみると友達を連れて行った時が一番集中したかなあ。いかがですか？写経、視点を変えると面白いですって思うの私だけかな。

ねがみ

箱根

実家の両親と弟と4人で箱根の日帰り温泉へ行きました。この4人で旅行など何年ぶりだろうか。中学生くらいの久能山？富士登山？などと記憶を辿るがあまり出てこない。40年ぶり位なんじゃないだろうか。義母から温泉にでも行ってきたらと言っていたら誘ってみました。子供たちも大人になったし、義母も主人も元気だし家のことを気にせず出かけられることはありがたいことです。

弟の運転で乙女峠から箱根へ。仙石原のススキ草原を抜けて途中のお蕎麦屋さんで早めの昼食をとり、桃源台のロープウェイ近くのホテルへ。紅葉には少し早く、平日ということもあり日帰り温泉利用客も少なく、ゆっくり堪能しました。その後、箱根神社へ。こちらは大勢の外国人観光客でごった返していました。

今まで思いつかなかったけれど、今回思っていたより喜んでくれたようで、両親が元気なうちにまた誘ってみたいなと思いました。

祥子

